

アジアの安定を

支える

日・米・加

マーク・ゲイン

アジアは、過去三分の一世紀のあいだ苦難の歴史をたどって来たが、いまほど激しい動乱の中にあつたことはまずなかったといえよう。各地で軍隊が国境へむけて集結し、あるいはすでに越境するなど、戦争や戦争の脅威はたえることがない。さらに注目すべきは、しばしば突然に劇的な政治再編成がなされたことである。政治化学とでもいふべき現象により、昨日の敵が今日の友——あるいはその逆になる。しかも、そうした再編成が必ずしも平和を約束してくれるわけではないのだ。

一九七五年、当時のサイゴンから最後

のG Iが去ったとき、われわれは相反する二つの予言をきかされた。ある者は、ベトナムにおける共産主義の勝利により、これに国境を接する非共産主義諸国は将棋倒しになるだろうといった。いわゆるドミノ理論である。一方、アメリカのインドシナ介入に強く反対する人々は、日本と北米の一部の人々をふくめて、アメリカ軍の撤退と同時にすべてが平和と協調の状態に戻ると断言した。

だが、今となつては、どちらの陣営の予言者もまちがっていた。東南アジアの資本主義国で倒れたのは一国もないし、昨日の戦場では、平和と繁栄が訪れるどころか、今日も戦闘が続いている。ただ一つの違いは、いま共産主義国の兵士を殺しているのはアメリカ兵ではなく、ベトナムの共産主義国の兵士だという点である。アメリカ軍撤退後に残された空間は、おたがいおたがいの政治的優位をねらう共産主義諸権力によって、すみやかに満たされたのである。

もし今日この混乱した地域に平和をもたらすことのできる要因があるとすれば、その要因は太平洋に面する共産主義諸国が作りだすものではなく、アメリカと日本とカナダで形成する、いわば「安定の三脚」が作り出すものであろう。

この安定の重要な要素の一つは、一九五一年に締結された日米安全保障条約である。この条約のもとに、アメリカは日本に核の傘をさしかけていたのであるが、同条約に対しては、これまで批判も多い。しかし、この条約が、三十年間以上にわたって日本国民が平和を享受し、また急速な経済的発展をとげることのできた一

因であつたのは、議論の余地がない。

世界中のほかの国々が自国防衛のために巨額の経費をさいているあいだ、日本はその資源の大部分をもっぱら奇跡的経済成長の達成のために使うことができた。

しかし、この安定の三脚には、単なる軍事的側面よりはるかに重要なものがある。それは、幸い、この三か国の非軍事的利害が偶然一致しているということである。三か国のすべてが平和と秩序ある世界を欲し、げんに表裏いずれの場でもそのために努力している。三か国のすべてが民主主義を信じ、報道の自由、複数政党による自由な選挙、選挙民に対する責任といった民主主義が意味するすべてのものを是認している。そしてまた平和、通商、人間の幸福、基本的人権の保全がたがいに固く結びあっていることを信ずる点も、これにおとるものではない。そのいずれか一つでも取り去れば、そのほかのすべてが大きくなしくずしになってしまうのだ。

三か国間の関係にはいささかのひずみもない、などというのは、やや素朴にすぎるだろう。実際、それは疑惑で染まることもしばしばである。日本は、アメリカの核の傘に頼って、侵攻勢力から身を守っているが、アメリカのアジアからの物理的撤退（例えば、韓国からのアメリカ軍撤退や台湾との最近の国交断絶）によつて不安感を強めている。それだけではなく、極端な危機的状況になつても、日本を保護するためにアメリカは核抑止力を行使しないのではないか、という疑念も増大している。

日米間の相互依存は非常に大きいため、

その一方のいかなる行動、不作為、ないし行動意図に対する疑念でさえ、両者に政策の再検討をせざる要因になるのである。十年前、アメリカが太平洋を制していた時代には、日本の政策決定上の不確定性は非常に少なかった。だが今日、日本の防衛と変わりゆくアジアにおける日本の位置は、論争的になつていく。——日本は自己の軍事力の強化を考慮すべきであろうか。——その規模は？——いつまでに？——中国とは、もつと密接な関係を推進すべきだろうか、それともソビエトとの緊張緩和の方向をさぐるべきだろうか。——あるいはまた、日本人が諸外国のうちいちばん讚美しているようにみえる、中立国スイスの例にならうべきだろうか……。

一方、アメリカ人自身も、日本に対し彼らなりの疑惑と怒りを抱いている。対日貿易で巨額な赤字をかかえるアメリカは、日本がアメリカの商品と投資をはばむその保護貿易の壁を低くするよう希望している。それがなされないと、アメリカの貿易収支はアメリカ経済、ひいては世界経済にとつて、引続き深刻な問題になろう、とアメリカは主張する。

カナダにとつて、今年は対日関係における重要な年である。日加両国が、一九二九年五月二十日に完全な外交関係を樹立してから、五十周年目にあたるからである。もつとも、日本とカナダとの国交は、もちろんこのときに始まつたのではない。一八八九年に最初の日本領事館がバンクーバーにひらかれ、続いて一九〇三年にはオタワに設けられている。カナダが日本に最初の商務代表を送つたのは、一八